

国民の“情熱”誇り高い文化



スーパー・クラシコで熱狂するインチャたち

それが首都であるブエノスアイノスへと飛び火したのである。

国民は大統領府 (La Casa Rosada) に抗議するために集まっていた。12月の初旬に銀行から一定以上の預金の引き出しを法律上で禁止し(僕も預金を引き出せずに苦労した)、この制度と依然変わらぬ不況に対する不満が爆発した形である。

テレビではどのチャンネルも大統領府前の警官隊と市民とのにらみ合いの様子、また周辺の店を襲撃している市民、そして火がつけられている道路が映し出され、完全に秩序が失われていた。結局その夜にデラ・ルーア大統領は辞任を表明し屋上に待機させていたヘリコプターで大統領府から緊急避難をしてしまった。

その後、約3週間で5人の大統領が(現在はドウアルデ氏)が変わった。4カ月以上経た現在でも銀行から預金を引き出せない状況が続く緊迫している。このように社会的、経済的にも多くの問題をかかえるアルゼンチンだが、彼らにとってフットボールとは彼ら自身を支える「情熱」であり、最も重要な文化の一つなのである。

2大チームに人気集中



スタジアム周辺を警備する騎馬隊

アルゼンチンフットボール協会(AFA)が統括しているリーグには、1部から5部リーグまでトータル103チームが凌ぎを削っている(プロ選手として生活できるのは3部までである)。その他各地方リーグにもチームが無数に存在する。

1部にはリーベル・プレートとボカ・ジュニオールというアルゼンチンを代表する2つのクラブがある(日本でいう以前の巨人と阪神のような関係、いやもっと熱狂的である!)。両チームのファン(Hincha: インチャ)はアルゼンチン国内を2分していると言われ、ライバル意識を持ち合っている。両チームの対戦は年に2回あり、「スーパー・クラシコ」(本来隣地区のクラブと試合を行うことをクラシコというが、この試合だけはスーパー(特別)と呼ばれている。

この試合はチケットが普段の倍額になり、国内がこの試合に釘付けとなる。実際、試合観戦やテレビ観戦ができなくても、どちらが得点を入れたかがすぐわかる。なぜなら、得点を入れた直後に必ず街で誰かが花火を打ち上げ、ビルの窓からどちらかの旗を振るからである。

高原の移籍一帰国は残念

高原のアルゼンチン移籍は衝撃的であった。中田以外の日本人選手は全く知られていなかったからだ。それが突然無名な日本人選手がボカ・ジュニオールに移籍してきたのだから当然だった。新聞紙上でも「ポンハ高原(本来はパポネになるのだが、日本人を馬鹿にするときなどに使われる)、日本のビック・マネー(テレビ・ユニフォーム等々)を連れて入団」などと書かれていた。

結局、彼は1ゴールしか公式戦で得点することができなかったが、帰国直前までのボカのインチャは高原を応援していた(アルゼンチンでは結果を出せない外国人選手に対しては厳しいのだ)。きっと高原がアルゼンチンのフットボール・スタイル、文化(言語・食事などの生活習慣)に積極的に溶け込もうとしたからだろう。

普段、コロンビア、ブラジル、パラグアイなどの代表選手でさえアルゼンチンのフットボールに慣れるには6カ月はかかると言われている。それを考えると高原の帰国(プレー面だけでなく経済的側面が強く影響した事実を考えると残念)は早すぎたと感じた。

アルゼンチンでの日本人に対するイメージは「お金持ち、電化機器、フットボール後進国」というものであり、それを払拭するチャンスだったと思うからである。しかし長く活躍するチャンスは逃したものの、彼のおかげで人間的な「顔のある」日本人のイメージに、よい意味で置き換えられたような気がしている。

現在のアルゼンチンの素顔

アルゼンチンではマドンナが主役を務めた映画で知られるエビータ(ペロン元大統領の妻)、チェ・ゲバラ(革命家)、マラドーナ(サッカー選手)の3人が国民の支持を圧倒的に受けている。そしてタンゴとフットボールを大切にす南米の大国であり、ブラジル、ペルー、チリなど多くの国が存在する南米の中でも比較的安定した主要国であった。

しかし昨年12月19日に暴動が起こった。スーパーなどの食料品の集団強奪(Los saqueos)が地方で発生し、

フットボールと暴動

一方、フットボールにまつわる負の部分として暴力問題は切り離せない。イングランドにおけるフールガンとは行動形態・様式も異なるのだが、1939年以来現在まで、およそ110人が命を落としている。

僕自身も在アルゼンチン中に一度暴動に巻き込まれそうになった。スタジアム内に収容しきれなくなった観客が、スタジアム側との押し問答のあげく、興奮して強引に入場しようとした。その直後、遠巻きに見ていた警官隊がいきなり、放水をはじめたが、あまり効果がないとみると催涙弾を発砲し、さらに騎馬隊で興奮した観客を追いかける。騎馬隊はいきなり警棒のようなもので殴りつけるのでインチャは一斉に逃げ出す。もちろん僕もいきなり全力疾走で安全だと思われるところまで逃げ出した。

また、試合後にはインチャ同士が衝突し、石などを投げ合い、怪我人がでることは日常的な光景となっている。それが行き過ぎると…。しかしそれも彼らのフットボール文化の一部なのだ。



ブエノスの象徴「オベレスコ」に続々と集まるインチャ

W杯を迎えるにあたって

この5月30日から開催されるW杯において、アルゼンチンも日本各地で予選を戦う。各メディアでは、フールガンなどある種の熱狂的なインチャが入国し混乱を招くのではないかという説が強調されている。当然「観光客」としての外国人ではなく、その国のフットボール文化を負の部分も含めてそのまま持ち込んで来る「熱狂者」たちである。その意味ではメディアが伝えていることは間違いではない。

しかし、その見方は一面的であるように思える。諸外国の社会背景・文化を知り、彼らをどのように受け入れていくことができるのか。それがグローバル社会を迎えた21世紀最初に行われるW杯で、日本が世界から問われているところなのではないだろうか。

そのような見方も含めて、皆さんには勝敗だけでなく、様々な視点からW杯に注目してもらいたい。

※「現地発！世界ユースレポート」のタイトルで以下のアドレスにアルゼンチンからコラムを書いていますので、興味ある人はアクセスをどうぞ。<http://www.sportsnavi.com/topics/Article/ZZZM3WWWCXNC.html>

(文中敬称略)
[5月15日/ニュース専修2面]